

第一章

帰宅したら彼氏と知らない女がセックスしてる声がドア越しに聞こえてきた。

「ん……あっ♡こんなところでだめえ……♡外に聞こえちゃうっ♡」
「とか言つて、まんこめっちゃ締まってるし。本当はこういうの好きなんだろう？」

「彼女さん……っ♡帰ってきたらっ♡どうするのっ♡」

「だいじょーぶだって♡あいつ、いつも終電間に帰ってくるし」
「たまたま早めに仕事が終わって帰宅したら、この仕打ち。あんまりだ。」

しかもここ、私の部屋なんですけど。あんた居候なんですけど？

何、勝手に女連れ込んでるの？

と、頭の中ではいくらでも彼を罵れるのに。

靴の裏が強力接着剤でコンクリートに貼り付けられているのではないかといいくらいに、体が重くて動けない。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡やあああ……♡はげしっ♡ひっ♡あああ♡」

「おらっ♡おらっ♡イケっ♡そのままイッちまえっ♡」

ご丁寧にパンパンパンと腰を打ちつける音まで聞こえてきた。

「う……」

急速に吐き気がこみ上げてきた。

これ以上ここにいるのが耐えられなくなつて、私はふらふらと扉から離れてエレベーターへと向かった。

(……何やってるんだろう、私……)

外に出たのはいいものの、行く当てもなくて。

結局たどり着いたのは、マンション近くのコンビニだった。

中に入って、何か軽く食べられるものと物色してみたけれど。

食欲なんて湧いてこない。それどころか、胃がひっくり返ったみたい
に気持ち悪い。

しょうがないのでパックの野菜ジュースだけ買って外に出て、スト
ローをぶっ刺してちびちび啜っているというわけだ。

(これからどうしよう……)

自分の部屋なのに帰れないなんて、バカみたい。

というか、実際馬鹿にされているのだろう。

だって、私が家主で家賃も全部私が払っているのに、あいつときたら部屋に女を連れ込んでイチャついてるんだから。

彼と二人で寝ていたベッドで、知らない女を押し倒してセックスしていたなんて吐き気がする。

（やっぱあの時、ドアを開けて怒鳴り込んでやればよかった）
今からでも、間に合うかもしれない。

引き返して、怒鳴り込んで、女を追い払って。

——そのあとは？

別れたいんだろうか。それとも謝罪を求めて、このまま関係を続けたいのだろうか。

——わからない。

そんなの、今は考えられない。考えたくもない。

こんなの知らなければよかった。なんで私は今日、仕事を切り上げて帰ってきちゃったんだろう。

いつも通り、終電間際まで残業していれば良かったのに……
「うう……」

かくん、と膝から力が抜けて地面にへたり込む。

「もうやだあ……」

空っぽになったジュースの紙パックをくしゃりと握りつぶして、立ててくっつけた膝に顔を埋める。

初夏だというのに、やけに夜風が冷たくて、寒くて。それが余計に虚しさを煽る。

もう涙すら出てこない。ただただ、無力感だけが胸の中に漂う。
このまま消えてなくなれたらいいのに。

「おーい。大丈夫？」

つむじの上辺りに、低い声が降ってくる。

恐る恐る顔を上げると――

真っ黒で光沢があるシャツに身を包んだ背の高い男の人が身を屈め、心配そうに私を覗き込んでいた。

首や手首にはびつしりとタトゥーが彫られている。

「ひっ……！」

どう見ても、カタギの人じゃない。

やばい人にロックオンされてしまったようだ。

「ななな、なんでもありませんっ！ 気にしないでください！」

「そんなところでへたり込んでるのに、なんでもないわけないだろう」

「？」

男の人は私の前にしゃがみ込み、視線を合わせてきた。

「……っ」

ギョツとして後ずさると、男の人が困ったように目尻を下げる。

「そんな怖がらないでよ。誘拐してレイプしたり、売り飛ばそうなんて思っていないからさ」

（もしかして、本当に心配してくれてる……？）

改めて、彼を観察してみる。

首や腕、胸元にびっしりと彫られた緑色のタトゥーに、つい視線が吸い寄せられてしまうけれど、ウェーブのかかった艶のある前髪の隙間から覗く黒目がちの瞳は、思いのほか優しげで。

張り詰めていた緊張の糸がふつと緩む。

（……悪い人じゃ、ないのかも）

「てか、あんた隣の部屋の人だよな？ 何度かチラッと見た気がする」

「えっ!？」

つい大きな声が出てしまい、慌てて手のひらで口を塞ぐ。

そういえば、隣に誰が住んでいるかなんて気にしたことなかった。平日は朝早く家を出て、夜中に帰ってくる生活だし。

休日は昼まで寝ていて、たまに彼氏とコンビニに行く程度だし。

「す、すみませんっ！ まさかお隣さんだなんて……!」

「あゝいいいいよ。だって、挨拶をしたこともなかったし。俺が一方的に知ってただけだから」

男の人は目を細めて前髪をくしゃつとかき上げた。

垂れ目がちの目元に笑いじわが出来て、一気に雰囲気が柔らくな

る。

「じゃ、改めて自己紹介。俺は相楽響也^{さがらきょうや}。あんたは？」

「……深瀬詩穂^{ふかせしほ}、です」

「これで俺たち、知り合いだな。……つーわけで、うちで飯でも食わない？」

「……は？」

唐突なお誘いに目が点になる。どうしてそうなるの？

「なんか腹減ってそうな顔してるから」

「わ、私は別に、そんな……」

ぐうぐうぐう。

アピールするみたいにお腹が鳴った。

さつきまで食欲がなくて、胃の底がキリキリしていたというのに。

こんなタイミングでお腹が空くなんて。

「ほら、やっぱり。夜遅くにこんなところで女の子一人で座り込んだら危ないし。これも近所づきあいのひとつでこと」

「……………」

確かにいつまでも、ここにいるわけにはいかない。

まだ部屋には帰りたくないし。

（…………もう、どうでもいいや）

なんだか考えるのもバカバカしくなってきた。

「…………じゃあ、お言葉に甘えてお邪魔します」

「よし、決まり。んじゃ、行こう」

響也さんがぬつと手を差し出す。その仕草があまりにも自然で。

気がつけば私は、彼の手を取っていた。

ぐつ、と手を引かれて立ち上がる。大きく、温かな手のひらの感触がやけに頼もしくて。

なんだかすぐく、ほつとしてしまった。

「はい、どーぞ」

部屋につくと、響也さんがドアを開けて中へ招き入れてくれる。入ると、部屋の隅に大きな水槽が鎮座しているのが目に入った。

（な、なんかすっごい大きな魚がいる……）

熱帯魚だろうか？　一メートルくらいはありそうだ。こんなに巨大なのは初めて見たかも。

「あーそれ、シルバーアロワナ」

のっそりとキツチンに向かいながら、響也さんがこちらに首を傾け

て言う。

「シルバーなのに……ピンク色に見えるんですけど」

「レッドタイプだからな。レアモノらしい」

「はあ……」

ひらひらと、水槽の中で優雅に尾びれを振るシルバーアロワナを見つめる。

LEDライトに照らされたウロコがぴかぴか光って、よく見たら綺麗……かもしれない。

「テキストに座って、待ってて」

言われるがままに、フローリングの床にぺたりとお尻をつけて座る。リビング代わりになっているのだろうか。部屋にあるのは、二人向けの小さなグリーンの布張りのソファとテーブル、アロワナの水槽だけ。

その水槽がやたら大きくて、壁にはめ込まれたようにぴったり収まっているダークブラウンの木製キャビネットの上に、どでんと置かれている。

なのにやけに開放感があるのは、キッチンと部屋の仕切りの扉を抜いているせいだろうか。

キッチンにいる響也さんは、一人暮らしにしてはやや大きめの冷蔵庫を開けてブツブツ何か呟いている。

そんな彼の広い背中を見ていると、なぜだかやけにほつとする。

響也さんは冷蔵庫から何か取り出し、鍋に放り込んで火にかけた。

ほどなくして、くつくつと何かが煮える音とともに、出汁の良い香りが漂ってくる。

（なんだか……実家にいるみたい……）

中学生の頃、部活が終わって家に帰ると、こんな匂いが出迎えてくれたな。

お母さんが台所でお味噌汁だか煮物だかを作っていて、それで――
「出来たぞー」

実家の思い出に浸っている私の目の前に、真っ白な陶器のどんぶりがどん、と置かれる。

（……なんだろ、これ……かきたま汁？）

表面はふんわりとした卵に覆われていて、何も見えない。

隙間からちらりとのぞく白い麵を見つけて、ようやくこれがかきたまうどんだと認識する。

「熱いから、気をつけてね」

響也さんは自分の分のどんぶりをテーブルに置くと、ぱちんと両手

を合わせて箸を持ち、ずるずると啜り始めた。

「……いただきます」

おずおずと箸を取り、うどんを絡めて一口啜る。

ほどよいコシのあるうどんにとろりとした汁がからんで、するすると胃に落ちていく。

さりげないけれど、しっかりと味がついた出汁は優しく温かく、お腹に染み入るようで。

こわばっていた心と身体が、ゆつくりとほぐれていくのを感じる。

「うまい？」

「はい……すごく美味しいです」

「ん、良かった」

響也さんは口元を緩め、大口を開けてずるずるとうどんを啜る。

その食べっぷりにつられるように、気がつけば私も夢中でうどんを
啜っていた。

「はあ……お腹いっぱいです。ごちそうさまでした。響也さんって料理上手なんですね」

「超時短料理だけだな。一応調理師免許持ってるし」

「えっ!? 調理師さんなんですか？」

「いや、本業は彫り師。料理は趣味」

響也さんがシャツの袖をまくり、自分の腕に彫られたタトゥーを指さす。

薄い緑色のタトゥーが、首から肘までびっしりと彫られている。

何の模様かは分からないけど……まるで、蛇が絡みついているみた

い。

（よく見たら……綺麗かも）

「……で、なんであんなところにいたの？」

響也さんが頬杖をついて、じつと私を見つめる。

どう答えようかと迷ったけれど、正直に話すことにした。

「……彼氏が、部屋に他の女を連れ込んで……エッチ、してたんです」

「……………あゝ」

妙に納得したような反応をされてしまった。

「そういえば昼間、よく隣の部屋からやってるっぽい声聞こえてたわ」

「え!？」

思わず前のめりになってしまふ。

「い、いつぐらいから……？」

「うーん……去年の夏くらい……な気がする」

響也さんは床に手をついて天井を仰ぎ、ちよつと気まずそうに言つた。

「……俺、ずっとあんたと彼氏が盛ってるのかと思つてたんだよね。

仲いいんだなーつて感心してた」

「……私は……平日昼間は仕事なので………」

「だよなー……」

響也さんもうどう答えていいか分からないのだろう。上を向いたまま黙り込んでしまった。

コポコポ、と水槽に設置されているエアポンプが立てる音だけが、

部屋に流れる。

（……ずっと、騙されてたんだ）

「……っ……」

ぽろぽろと目尻から涙がこぼれる。

響也さんが慌てふためき、がばつと身を起こした。

「え、ちょ、ど、どうした？」

「……うえっ……えっ……わたし……くやしくてえ……」

涙と共に、抑えていた感情がどつと溢れてくる。

「あいつ……仕事リストラされて困ってるって言うからあ……っ、落ち着くまで、うちに住まわせてたのにつ……ずーつと部屋でゴロゴロしてっ……ゲームばかりしてっ……家事もしないでっ……挙げ句の果てには女連れ込んでセックス、とかっ……何それ……っ、私、バカ

みたいじゃないですかああ……！」

「……そりゃ、最悪だなあ……一発殴っても許される」

「ですよええ!? 仕事っ、決まったら結婚しようねって……言つてた、のにつ……うえっ……うそつき……っ……うっ、うえええええ……っ」

「あーもう、泣くなよう。ほーらよしよし、いい子いい子」

響也さんが私の隣に座り、優しく背中をさすってくれる。

大きな手のひらの体温が、ブラウス越しに背中に伝わって来て。こわばった身体に染み渡って。

気づけば私は、響也さんの胸にすがりついていた。

「うううう……えっ……うわああああああんっ！ 悔しい！ 悔しいいいいいい！ バカッ！ ヨシキのばかあああああああ！」

「そうだそうだ、ヨシキは大馬鹿野郎だ！」

響也さんが大声で叫び、赤ちゃんをとんとんするように背中を叩いてくれる。

「わたし……なんてっ……ヨシキとお！二年もセックスしてないの
にいいい！なんでっ！他の女とセックスしてんのよおおおおお
！」

「こらくヨシキく！こんな可愛い彼女ほったらかして浮気なんて最
低だなく！俺が貰っちゃまうぞく！」

壁に向かって、響也さんが叫ぶ。

「ふえっ!?」

衝撃で涙が引っ込んでしまった。

「ななな、なんでそうなるんですか？」

「ん？　だって詩穂のこと可愛いな〜って思ったから」

にへっ、と響也さんが笑う。

気がつくとたくましい腕にガッチリホールドされていた。

まるでもう離さないぞと言わんばかりだ。

「かつ……からかわないでください……」

精一杯抵抗してみるけれど、響也さんは愉快そうに目を細めるばかりだ。

「俺、本気なんだけどなく。信じてくれないんだ？」

「だ、だって……さつき知り合ったばかりだし……」

「でも、初対面じゃないだろ？　俺は詩穂ちゃんのこと、前から気になってたし」

（いきなりちゃん付け!?)

馴れ馴れしいと思いつつも、イヤじゃない自分がいる。

「ね……仕返しに俺と浮気するっていうのは、どう？」

どんだん響也さんの顔が近付いてくる。

黒目がちの瞳にたつぷり湛えられた情欲の色。

鼻先をかすめる、ラム酒のような甘い香り。

かすかに開いた薄い唇からは、桃色の舌が覗いていて、隙を見せたらあつという間に食べられてしまいそう。

（やめて……！ そんな色っぽい顔近づけないでっ！）

このままじゃ顔^{がんあつ}圧に負けて全てを許してしまいそうだ。慌てて顔を背けようとする、顎を掴まれてしまった。

「……逃げないでよ」

「う……」

「俺のこと、怖い？」

「……少し……」

「そっか。でも、飯は美味かっただろ？」

こくん、と頷くと耳もとに唇を寄せられる。

「美味い飯を作る男に悪い奴はいないぞ？」

「そんな話……聞いたことないですよ……」

「じゃあ、これから俺が証明するから」

ぐつ、と響也さんが顔を近づける。

「イヤだったら、途中で逃げてくれてもいいから」

「……う」

熱い吐息が耳たぶにかかり、ぞわつと背筋が痺れる。

顎にかかる指先の力は決して強くないのに、逃げられない。いや、

逃げる気がないのかもしれない。

このまま彼に身を任せたら……どうなるんだろう？

「絶対気持ちよくしてやる。……隣の彼氏に、エッロい声聞かせてやろうぜ？」

「くく………ッ！」

艶を帯びた、低く甘い声が耳朶を打つ。

もう限界だ。圧倒的なオスの色気に耐えられない。

まるで暗示にでもかかったかのように、全身からくつたりと力が抜けていく。

腕の中に倒れ込んだ私の顎を再び指で挟んで持ち上げ、響也さんが淡い笑みを浮かべた。

「めいっばい、やらしーこと……しよ？」

視界の端に、水槽の中でネオンのように輝くライトに照らされたピンク色の尾がたなびく。

そのまま大きな身体が覆い被さってきて——陰る視界の中、光が流線を描いて消えていった。

「ん……はっ……ん……むう……♡」

ふにゅ♡ふにゅ♡と揉みほぐすように上唇を吸われる。

目を閉じているからだろうか。触れる滑らかな薄い唇の感触がやけに際立って、微かな電流を流されたみたいにぞくっ♡ぞくっ♡と断続的に甘い疼きが背中を降りてゆく。

（口の中、苦い……）

タバコを吸っているのだろうか。独特の苦みが口腔内に移って、ま

るで媚薬みたいに粘膜を侵食してゆく。

（そういえば……最後にヨシキとキスしたの……いつだったっけ？）

どうにか記憶を掘り起こして思い出そうとするけれど、ピンボケした写真みたいにぼんやりとしか浮かばない。

付き合いたての頃は、唇を押しつけ合うような不器用なキスで、ドキドキしていたはずなのに。

「何、考えてるの？」

「え……あ……っ……」

「俺のこと、ちゃんと見て？」

れろお……♡と舌で唇をめくられて、ぬらついた裏側をねぶられる。歯列を割って舌先で口蓋を突かれると、ぴくん♡と腰が跳ねた。

（ただ……キスをしてるだけなのに……なんでこんなに……興奮、し

ちやうの……っ♡)

ぴちゃ♡ぴちゃ♡と淫らな水音が耳元に響いて、頭の中へ侵入してくる。

これまで交わしたどんな口づけよりも淫らで、繊細で。

気づけば私は夢中で、差しこまれた舌へ吸いついていた。

「ん……ふう……♡は……ん……ちゅ……れろ……♡」

「自分から舌突き出して……♡すげーやらしい顔してる」

「ふぁ……♡そんな……んう……♡」

「キス……好き？」

「わかんな……♡でも……これは、きもちい……です……♡」

「俺のキスが好き……っってことかな。はは、うれしー」

ぬろ……♡と舌が絡み合って、互いに纏った唾液がちゅぷちゅぷと

湿った音を立てて混ざり合う。

まるで口の中で交尾しているみたいで……身体の内側がじわつと熱で炙られてゆく。

（まだ……キスしかしてないのに……っ……♡頭、溶けそっ……♡）
ちゅ……ちゅぶ……♡

口を窄めて差し出された私の舌へ吸いつきながら、響也さんは器用に片手でブラウスのボタンを外してゆく。

あつという間にキャミソールの中へ手を差しこまれ、ブラをぶちつと外されてしまった。

「あ……っ♡」

ワイヤーががちりホールドされていた乳房が、突然自由になって戸惑いがちにぶるんと揺れる。

かたちを確かめるように、キャミソールの中で蠢く無骨な手が乳房をまさぐる。

「詩穂ちゃん、思ってたよりおっぱい大きいんだな。それに……ツンと上向きで美乳じゃん。好きな形かも」

「……うあ……♡さ、触っただけで……わかる、んですか……？」

「ぜーんぜん分かる。俺、おっぱいマイスターだから」

ぺろん、とキャミソールをめくられて、乳房を剥き出しにされてしまった。

「や……っ♡やだ……っ……♡」

「何が？」

「だ、だから……おっぱい、そんなにじろじろ見られると……っ♡はずかし……っ♡」

「へ〜？ その割には嬉しそうに見えるけど？」

響也さんの唇が、ちゅっ、と乳首に吸いついた。

ふに……ふに……♡

乳輪ごと食まれて、軽く持ち上げられる。

「ひぁ……っ♡」

舌で根元から乳首を倒されてねろねろ♡と嬲られる。

乳頭の中からじわあ……♡とむずがゆい快さが広がって、くちゅくちゅ♡と甘噛みされる度にじんっ♡じんっ♡と上半身に淫らな痺れが走った。

「ん……♡乳首もうコリッコリになってる……♡ちゅっ……♡おっぱい、感じやすいんだね……♡」

「ん……あ……♡は……あ……♡」

自分からおっぱいを押しつけるようにぎゅうつと響也さんの頭を抱え込む。

ぐぢゅ♡ぐぢゅ♡と口の中で乳房の先端を揉みくちやにされてぢゅううう♡と強く吸い上げられると、おっぱいの内側から快感を引きずり出されたみたいにじんじん♡熱く痺れてくる。

(や……っ♡何これ……♡おっぱいでこんなにつ♡感じるなんて……っ♡)

ヨシキの義務的な愛撫とはまるで違う。身体の芯を蕩かされて、どんどん神経が剥き出しにされてゆくような――

(っあ……♡このまま♡おっぱいでイッちゃう、かもお……♡)

ちゅぽん……♡

「……え……あ……」

不意に、乳房から唇が離される。

頂点近くまで引き上げられていた快感が一気に下降して、ひどく残念な気持ちになってしまった。

（あと少いで、イケそうだったのに……）

「イキそうなところ、ごめんな？ もーつと気持ち良くしてあげるから」

「はえ……？」

肩を抱かれてソファから立ち上がられる。

「ヨシキとき、同じ事してみない？」

響也さんが玄関を視線で指し示す。

「げっ……玄関です……んですか？」

「そう。目には目を歯には歯を、って言うじゃん？ 玄関なら部屋の

どこに居ても聞こえるし。メツチャクチャにイキまくって、ヨシキを悔しがらせようぜ？」

「ふあ……」

むにゅむにゅと片手で乳房を弄びながら、響也さんが口の端を持ち上げてニツと笑う。

胸の奥でくすぶっていた愉悅の残滓が、再び熱を帯びてくる。

（頭……ぼーつとして……何も考えられない……っ♡）

半ば響也さんに抱えられるようにして、玄関先までフラフラと歩く。背中に密着する引き締まった腹筋の感触が心地良くて、うっとり身を任せていると、

くにつ♡

「………ッ♡」

かりっ♡

不意に爪で乳首をかきむしられ、背筋がぎくん♡とこわばった。

「や……っ♡な、何す……っ♡」

「ん？　なんか寂しそうに見えたから。あっちに行くまでずーつとイジってあげる」

「い……いいですっ♡そんなことしなくても……っ♡あゝ………
ッ♡」

きゅううう♡

背後から乳首を摘まれて、腰が砕けそうになってしまった。

前のめりに腰を折り、どうにか与えられる刺激から逃れようとするけれど。

響也さんの指は執拗に追いかけてきて、大きな手で乳房を鷲づかみ

にする。

くりくりくり♡ぎゅう♡むにいいい♡

痛いくらいに指腹で乳頭を押し込んだかと思うと、根元から摘まんで引つ張り上げる。

かと思うと、すりすりすりすり♡と優しく突起をさすられて。

痛みとほの甘い快感がないまぜになって、どんどん力が抜けていく。

「は……ひい……♡いつ……はあ……♡♡」

「ほーら。全然進んでないけど？ これじゃいつまで経ってもたどり着けないぞ？」

「ちょ……♡だ、だめ……♡♡手、離して……♡♡」

「なんで？ 好きなんでしょ？ 乳首虐められるの」

「だ、だって♡……♡これじゃ、歩けな……♡♡♡」

「ふーん、がんばりな？」

ぴんっ♡

「ひ……んっ♡」

乳首を指で摘ままれたまま乳頭を強く弾かれて、がくんと膝から崩れ落ちそうになってしまった。

「詩穂ちゃんってさ……ちよつとマゾの気あるよね。いじめられるの好きそう」

「そ……そんなこと……ない……っ♡」

「へえ？　じゃあちよつと試してみる？」

「何を……あ……っ♡」

ぐにいい♡

乳房から離れた片手が股間に伸びて、パンストをくっ♡と引っ張る。

パンストがぐうぐと伸びて、センターシームがぐいぐい♡とおまんこに食い込んでしまう。

「な……っ♡何してるんですか……っ♡」

「何って、パンストおまんこに食い込ませてる」

「そういうことじゃなくて……えあっ♡」

ぬ……りゅ♡ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡

ショーツを掴んだまま、ゆつくりと上下に擦り立てられる。

おまんこに食い込んだセンターシームがショーツ越しに淫裂を擦り、ぬぢやぬぢや♡と粘った音を立て始めた。

「うわゝすげえぐぢやぐぢや言ってる。恥ずかしいの好きなんだ？」

「しっ……知らない……♡あっ♡あっ♡あっ♡」

イケそうでイケない絶妙な刺激がもどかしくて、もっと目一杯気持

ち良くなりたくて。

自分からぐっ♡ぐっ♡おまんこをショーツに押しつけて、浅ましく腰を揺らしてしまふ。

「お、自分からクリコキ始めちゃった？　もしかしてクリオナ派？」

「だからあ……♡そんなのっ♡わかりませ……♡へあああっ♡」

「そんなら初めから言つてよく手伝つてあげるのに♡」

淫蜜でべったり湿ったショーツをぷっくり持ち上げた肉芽を、指先が淡く引つ搔く。

「ひゃ……っ♡」

「おうもうカタくなってる♡いっぱいコスコスしてやろうな♡」

「ひゃううう♡やあ♡やめてええ♡」

鋭敏になつた肉粒の先端を、かりっ♡かりっ♡と小刻みに揺らされ

る。

触れるか触れないかという柔らかい愛撫だというのに。

痺れるような性感が肉芽の中心に集まって、どんどん血が集まってきて……

もつと触ってほしい♡と言わんばかりに、腰を突き出してしまふ。

「自分からおまんこ差し出しちゃって……♡詩穂ちゃんって思ってたよりエロいんだな。俺コーフンしてきちゃった」

熱い吐息を耳に流し込まれてぞわつとする。

ぐっ♡とお尻に硬いモノが押しつけられると、更に腰の周りにずん……♡と重い疼きがのし掛かった。

(これって……♡響也さんのおちんぼ……っ♡すご……♡こんなに、おつきくなつて……っ♡)

ズボン越しでも分かるくらい、大きくて、熱くて。

彼が私で昂ぶってくれているのが嬉しくて。片手の肘を曲げて彼の首に手を回し、ペニスに股間を押しつけるみたいに、お尻を突き出してくねらせる。

（やだ……♡なんて格好してるの、私……っ♡）

まるでAVみたいにはしたなく腰をへこつかせてっ……♡
これが自分の姿だなんて、信じられない。

「やば……♡詩穂ちゃんかーわい……♡俺のちんぽ欲しいんだ？」
顔をぐっ♡と横に向かされ、響也さんに唇を吸われる。

舌でぐちゃぐちゃと口腔内をかき混ぜられて、こめかみが痺れて後頭部を降り、背中がぞくぞく♡と甘い恍惚で満たされてゆく。

「う……は♡あ……あ……♡わかん、な……♡」

「まだ分かんないんだ？ 詩穂ちゃんがデカチン大好きドスケベ女だっついていい加減わからせてやろっか？」

「ちが……ちがいます……あ………ッ♡」

ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡

愛液でヌメヌメになった肉芽を指腹で押し潰され、神経が集まったところめがけてこね回される。

異なる快感が幾重にも身体の中で折り重なって、膨張して。

淫らな熱が頭の中を灼いて、真っ白に塗り潰されるっ……♡

(だめえええ♡イク♡イクイクイクッ♡イク………ッ♡)

「………ッ♡♡」

ぢゅううううう♡と唇を窄めて響也さんの唇に吸い付き、悦びの喘ぎを喉へ逆流させる。

まるで身体全体が叫んでいるように、びくんっ♡びくんっ♡と背中が波打ち、腰ががくがくとわなないた。

「よし。上手にイケたな♡えらいえらい♡」

「っあ……は……へ……あ……あ……♡」

崩れ落ちそうな私を抱き留め、響也さんがいいこいいこ♡するよう
に頭を撫でてくれる。

弛緩したおまんこからはとろりと蜜が溢れて、内股をべつとりと濡
らす。

もう十分にイッたはず、なのに。

（まだ……イキたい……♡）

下腹部の疼きが止まらない。

底が抜けたみたいに、快感を欲している。

(私……こんなに性欲強かったっけ……?)

「……なあ、ちんぽ、ハメたい？」

耳たぶにふつと吐息がかかり、頭の芯がじんっ♡と痺れる。

まるで私の欲望を見透かしたみたいなの囁きに、魅入られたようにうなずく。

「……ハメたい……ですっ……♡」

「はは、素直♡♡いいね、そういう子大好き。じゃあさ、自分で下着、脱げるよな？」

魅入られたようにこくと頷き、するするとストッキングとショーッをずりおろす。

その仕草を、響也さんが目尻を下げて愉しげに見つめている。

(う……見られてるとなんか……恥ずかしくて……おまんこ熱くなっ

ちゃう……♡)

服を脱ぐ程度でこんなに興奮しちゃうなんて、ほんとに私はマゾの気があるのかも。

「……脱ぎました」

じっ、と響也さんの視線が剥き出しの下半身に注がれているのを感じ、つい恥ずかしくなって内股になってしまう。

「もじもじしてる詩穂ちゃん、かわいいー。お尻もむっちりしてて、触り心地よさそうで……」

と言いながら、指先がお尻をつうつと撫でて――

「後ろから、ガンガンブチ犯したくなるな」

自分がお尻を突き出しておちんぽをずちゅずちゅ出し入れされている姿が頭をよぎり、ぞわぁ……♡と尻タブが震える。

（こっ……♡こんなことで昂ぶるなんて……っ♡私、どんだけ期待してるのっ……♡）

「俺も準備するから、ちよつと待っててね」

響也さんがポケットからコンドームの袋を取り出す。

そしてズボンのベルトを外してジッパーを下げ、ズボンとトランクスを引き降ろした。

ばるんっ♡と目の前に現れた肉棒の大きさに、思わず目を瞠る。

（なっ……♡何これえ♡おっきい……♡）

響也さんは慣れた手つきでコンドームを装着すると。

「よ……っ」と

背後から羽交い締めするように、私の両脇を抱え上げた。

「……ッ!？」

「このまま、挿れちゃおつか」

「え……っ!? ちょっとまつ………ッ♡」

ぐぶぶううう……♡

（うそ……っ♡ナカッ、ホントに入って……っ……♡）

「っは……♡スゲ……ぬっっぽり入っちゃったな」

「………ッ♡♡………!………♡♡」

背筋に電流を流されたみたいにばちばちっ♡と甘く痺れる。

（何……これっ……♡うそ……♡挿れただけ、なのにつ……♡）

深く、重く秘奥に突き刺さる肉棒に貫かれ、ぱくぱくと口を開閉させるより術はない。

両腕を拘束されて、まるでオナホみたいにおちんぽでおまんこずばずばされてっ♡

腰だけへこへこ動いてっ♡おちんぽ美味しいっておまんこが喜んでるっ…………♡

「ほら、今度は自分で気持ち良いところ探して動いてみな？」

不意に両手が自由になる。

身体を支えきれなくてよろよろと目の前の壁に手を付くと、

「……………あ……………ッ♡」

ぐに♡とお尻を割り開かれ、小刻みにお腹の裏を擦られた。

「……………♡……………ふ……………う♡ん……………♡……………ッ♡♡」

ず……………りゅっ♡ず……………にゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡

カリの出っ張りをべったり膣壁に押しつけられて、ぬぢぬぢ♡と執拗に擦られる。

じいん……………♡と甘い疼きがお腹の奥まで届いて、もっと身体の芯ま

で響かせたくなつて。

気づけばがに股にばかあ♡と足を開いて、無様にへこへこ♡腰を力クつかせていた。

「はは……詩穂ちゃんそんな下品なカッコするんだ。意外……♡」

「だって……♡響也さんが♡きもちい……とこ♡擦る、から

……♡」

「俺のちんぽ、気持ちいいんだ？」

「は……い……♡」

「じゃあさ、もつとえつちな声、聞かせてよ」

「……だ、だって……♡ここじゃ、外にも♡聞こえちゃう、から

……♡」

「聞かせたくてやってるんだから、別にいいじゃん。今さらヨシキに

気を遣ってんの？」

「そ、そういうのじゃ、ない、けど……っ♡っ……う……♡」

唇を噛みしめて、漏れそうな悦声を閉じ込めて飲み下そうとする。

「じゃあ……何？」

「はずかし……からっ……♡えっちな声っ、出しちゃったらっ……♡
歯止め、利かなくなる……っ」

「ふーん……てことは、まだ詩穂ちゃん本気出してないんだ？　じゃあ……そんなのどーでもよくなるくらい、イカせてあげる」

ぬりゅう……♡

ペニスがおまんこからゆっくり引き抜かれる。

「んう……♡」

未練がましく肉竿にすがりつく膣襞が引き剥がされる感覚に身もだ

えしていると、身体を壁に押しつけられ、腰をぐう♡と掴まれる。
壁にすがりつくようにして手をつくとき、突き出したお尻にぱん♡
と股間をたたき付けられた。

ど……………ッちゅん♡♡♡♡♡

「……………——♡♡♡♡♡お……………おッ♡」

脳髓まで震わせるような衝撃が、身体の奥を貫いた。

(う……………うそ……………お……………♡こ、これ……………ふ、深すぎ……………♡)

「どう？ これでもまだ、本気出せない？」

「……………♡♡ひ……………♡……………♡♡ひ……………い……………——」

……………♡♡

片足を高く持ち上げられて肩にかけられ、ごりゅ♡ごりゅ♡と
容赦なく秘奥を抉られる。

押しつけられた切っ先がぐいぐいと降りた子宮を押し上げて、圧迫感と暴力的な快感がぐちゃぐちゃに混ざって、お腹の奥で暴れてるっ♡

「っは……♡やればできるじゃん。ほら、ケダモノみたいなぶつとい喘ぎ声、ヨシキにすっかり聞かせてやりな？」

ぐう♡とお腹を押されて、ポルチオがじいん♡と圧迫される。

「だ……めっ♡お腹っ♡押さないで……っ♡」

「なんで？ スゲーまんこぎゅーぎゅー締まって、気持ち良さそうなのに」

「だから……ダメ……なのお♡ばかに……なっちゃう……からあああ……♡」

「なっちゃえばいいじゃん。頭空っぽにして、おまんこで気持ちよく

なることだけ考えて。そーゆーやらしー声、壁の向こうにいるヨシキに聞かせてやんなよ」

ぐりぐりぐりぐり……♡

柔らかく蕩けた最奥の粘膜へ、めいっばい亀頭の先っぽをぐりぐりと押しつけられる。

「い——ひいひいひいひい……く……く………ッ♡」

頭のとっぺんから突き抜けるような高い悲鳴が、喉から迸った

「おいしい声♡それぞれ♡ほら、もつとドエロい声出して。ヨシキを思いきりびびらせてやろうぜ」

ばん♡ばん♡ばん♡ばん♡

背後から突き上げられて、ふるん♡ふるん♡と乳房が揺れる。

おまんこアピールするみたいに自分から股間を突き出して、ぶつと

いちんぽぐつぽり奥まで呑み込んで♡

こんなの私じゃないみたい。私の中が響也さんに作り替えられていくみたいで、ゾクゾクする……っ♡

「ほら♡ほら♡ほら♡まんこがイキたいイキたいってうねってるな？我慢しないでいいんだぞ？好きなだけイッちやいな？」

「は……ひいい♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡」

僅かに残っていた理性の衣が、ぼろぼろと剥がれて崩れ落ちていく。残るのは、思うがままに与えられる喜悦をしゃぶりつくしたいという、剥き出しのメスの本能だけ。

どちゅ……♡ごちゅごちゅ♡ぐりゅっ♡ずちゅずちゅっ♡ばっちゅばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡ばっちゅ♡

短いストロークで深く秘奥を穿たれ、必死に壁にすがりついてむせ

び泣く。

「おっ♡おっ♡おっ♡んお♡おっ♡ほっ♡おっ♡おっ♡……ッ
♡♡♡」

(ぎもぢいっ♡ぎもぢいっ♡頭ばかりなりそおおっ♡やばい♡くる
っ♡やばいのくるうううう♡)

あつという間に高みに押し上げられて、ぎゅうっ♡と強くお腹の奥
が緊縮する。

ぞくぞくぞくううう♡と首筋まで這い上ってくる絶頂の予感に、大
きく身を震わせた。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡ひんっ♡いいっ♡いっく♡いっく♡いっく♡
いっく♡いっく♡いっく♡いっく♡うううううう♡」

どぶうううううう♡どぶ♡どぶ♡びゅるうううううう♡♡

ゴム越しに、熱い体液が迸るのを感じる。

秘奥に密着した肉棒が精を吐き出しながらどくん♡どくん♡と拍動するのを感じながら、全身に染み渡る絶頂の余韻に身を任せた。

「は……っ♡やつば……♡詩穂ちゃんびくびく止まんないねえ……♡
まだまんこびくびくしてるよ？」

「は……え……♡あ……♡あ……♡」

「もう一回したいけど……詩穂ちゃん壊れちゃったらいやだしこの辺でやめとこっか」

ずるう……♡

愛液でべっとり濡れたコンドームを纏った肉棒が、ゆっくりと引き抜かれる。

ずるり、と壁に沿うように崩れ落ちた私を、響也さんが抱き留めて

くれた。

「詩穂ちゃん、よく頑張ったな」

労るように、私の背中を撫でてくれる。

温かく力強い指先の感触が心地良くて。このままうつとりと身を任せて眠ってしまいたくなる。

とろりとまどろんでいると――

ガチャッ！

隣の部屋のドアが、やけに慌ただしく開いた。

「……………」

（もしかして…………ヨシキ!?）

そのままこちらへ来るのではないかと身を固くして息を潜めていると、

ばたんっ！

今度は勢い良くドアが閉まる音が聞こえてきた。

「……今日は、このまま泊まってく？」

響也さんが玄関のドアにちらりと視線をやる。心配してくれているのだろう。

温かく大きな彼の身体にすっぽり包まれて眠りたいという欲望に駆られるけれど――

「……いえ……ヨシキとちゃんと話し合いたいので……帰ります」

「……そっか」

「でも……もう少しだけこのままでいさせてください」

「ん……分かった」

響也さんがぎゅ、と私を抱きしめてくれる。

私は彼の胸に頬を押しつけ、とくん、とくんと規則正しく脈打つ心臓の鼓動に耳を澄ませた。

第二章

——それから、数日が経った。

「あ」

帰宅途中、最寄りのコンビニでとりあえずの夜食を買って出てくると、出入口近くに設置された喫煙所でタバコを吸っている響也さんと目が合った。

「お、詩穂ちゃん。今帰り？ 随分遅いな」

タバコをふかしながらチラリと横目でこつちを見て、ニツと笑う。

「はい。ギリギリまで仕事が終わらなくて。何とか終電に飛び乗りました」

「そっかゝ大変だな」

「響也さんは……買物、ですか？」

「や、俺はタバコを吸いに来ただけ。うち魚がいるから、部屋で吸うのは良くないし」

響也さんは顔をしかめてすばーとタバコをふかした。

薄い煙が立ち上り、夜闇にすうつと吸い込まれていく。

「そっか……大変ですね」

「まあ、飼ったからにはきつちり面倒見ないといけないし、アロワナつて三十年くらい生きるらしいから」

「えっ、ずいぶん長生きなんですね!？」

「だろゝビックリした。しかもデカくて場所取るし、濾過槽作らないといけないし、面倒くさいんだよね」

なんて言いつつ、その横顔はどことなく楽しげだ。

外見の雰囲気から察するに、なんとなく束縛を嫌うタイプだと思っ
ていたのだけだ。

自分からそんな『面倒』を引き受けてあの魚を飼っているのだろう
から、むしろ寂しがり屋なのかもしれない。

「……………あの、この間はありませんでした」

「あゝ……………うん。で、あの後どうなったの？」

「……………彼氏と話して、出て行ってもらいました」

「へへ！ 随分早いね。じゃあ、もう彼氏部屋にいないんだ？」

「はい。どうせ私の部屋だったから、着替えと洗面用具くらいしか荷
物はなかったし。出て行って！ って怒鳴ったら、土下座されたんで
すけど……………強引に追い出しました」

「やるじゃん。頑張ったな」

吸い終わったタバコの吸殻をゴミ箱に捨て、わしゃわしゃと私の頭を撫でる。

ふわりと煙草の香りが鼻孔をくすぐった。

それに入り交じってこの前感じたラム酒みたいな甘い香りに、今日はレモンみたいな爽やかさも混ざっている。

ヨシキや職場の男性陣は、香水なんてつけていなかったし。

かすかに香るそれが、なんだかやけに色っぽく感じる。

「……響也さんのおかげです。私一人だったら、ずるずる許しちゃってたかも」

「や、俺は何もしてないし。そうだ、これから空いてる？」

「空いてます、けど……」

「なら、鍋パしようぜ。フリーになったお祝い。水炊きでも作るから」

「い、今からですか!？」

「ん。詩穂ちゃん、どーせ今日もロクに食べてないんだろ？ 今日は寒いし、鍋で温まるには丁度イイだろ」

「えっ、えっと……」

「……イヤ？」

響也さんが身をかがめて、私の顔を見上げる。

黒目がちの瞳がやけに潤んで、まるで捨てられた子犬みたいだ。

（見た目は怖いくせに……そんな顔するの、ずるい……!）

「……イヤじゃ、ないですけど……」

「決まり。んじゃ、買い物行こ。駅前のスーパーならまだ開いてるだ

ろ」

響也さんがズボンのポケットに手をつ込み、鼻歌まじりに歩き始めた。

駅前のスーパーで買い物を買ませ、響也さんの部屋にお邪魔する。

「そのへん座つてよ。ちやちやつと作っちゃうから」

「いえつ。て、手伝いますっ」

「うーん、じゃあテーブル拭いて、取り皿と箸並べといて。白い小皿がいいかな。たくさん食べたいならドンブリ使つていいから」

響也さんがキッチンの隅に置かれたウエットティッシュのボックスを指さす。

ウエットティッシュを取つてテーブルを拭いた後、キッチンの食器

棚を開けて白い小皿を探す。

(……一人暮らしなのに、随分たくさん食器があるんだな)

しかも、どれも二〜三組ずつ同じものが揃えられている。

おそらく、普段から誰かにご飯を振る舞っているのだろう。

もやつとしたものが胸をかすめる。

(いやいや、余計な詮索しすぎでしょ)

強引に頭に浮かんだ想像を振り払い、食器とお箸を二人分取ってテーブルへ並べる。

ほどなくして、響也さんがテーブルの中央にカセットコンロを設置し、澄んだスープが入った白い鍋を恭しく置く。

そして綺麗に切り刻んだ野菜とお肉をどつきり盛ったステンレスバットをお盆に載せて運んできた。

「よっし、んじゃ鍋パはじめろぞ」

カセットコンロのつまみを回すと、ボツ、と青白い炎が立ち上る。響也さんは菜箸で鶏肉を鍋に放り込み、じつと鍋を見守り始めた。

「……煮えるまで時間かかるな。そーいや詩穂ちゃんって、お酒飲める？」

「カクテルとか少しだけ、なら」

「分かった。ちよつと待ってて」

響也さんが立ち上がり、キッチン冷蔵庫を開けてごそごそ漁り始めた。

「はい、これで乾杯しよ」

戻ってきた彼の手には、桃のチューハイとビールの缶が握られていた。

「わ、用意がいい……！」

「こないだ、知り合いが持つて来たヤツが丁度余つてたから」

「ありがとうございます、いただきます」

二人揃つて缶のプルリングを開け、高く掲げる。

「んじゃ、詩穂ちゃんの新しい門出に、かんぱーい」

「かんぱいっ！」

こつん、と小さく缶の縁をぶつけ合い、それぞれ一口飲む。

「はあ……これ、甘くて飲みやすいですね」

「もうそろそろ煮えた頃かな。はい、どーぞ」

響也さんがお肉と野菜をよそつて、小鉢を私に手渡す。

はふはふとお肉を頬張ると、熱々の肉汁と優しい出汁が混ざり合っ

て口の中が幸せで満たされるようだ。

「すつごく……美味しいです……」

「ハハ、そりや良かった。詩穂ちゃんは美味そうに食うから、食べさせがいがあるな」

響也さんが白滝を箸で摘まみながら、嬉しそうに笑う。

その笑顔に、思わずドキッとしてしまった。

「……いつも、こうやって誰かとご飯食べてるんですか？」

「んーそうだなー。職場のスタッフ呼んで飯食わせたりはしてるかな」

「わ、すごい。面倒見いいですね」

「ま、俺一応シャチョーだしね。見習いだとほぼ無給だから、飯くらいは腹いっぱい食わせてやらないと」

響也さんがずず、と汁を啜る。

(……本当に、スタッフだけなんですか?)

なんて言葉が喉まで出かかりそうになってしまった。

今私が飲んでいる缶チューハイも『知り合いが持つて来た』と言つていた。

もしかしたら私以外の女の子とも、普段からこうして二人きりでご飯を食べているのかもしれない。

(……でも、そんなの私かとにかく言う筋合いないし)

そもそも私はただの隣人で、彼も純粋な親切心でご飯を振る舞ってくれているのだろうし。

……この間はセックスしちゃったけど。それもお互い魔が差した、というか。

ヨシキへの仕返しって側面が大きかったし。

きつと響也さんのにも、一夜の過ちとしか捉えていないだろう。

（だから……期待しちゃダメだ）

「そろそろシメにするか。雑炊とラーメン、どっちがいい？」

「じゃあ、雑炊で」

「りょーかい。飯取ってくる」

響也さんが立ち上がり、冷凍庫からタッパを取り出す。

（ご飯冷凍してるの偉すぎる……！）

でも、もしかしたら誰かに食べさせるために常備しているのかも。

（……そんなの、私には関係ないし）

これ以上考えたら負けだ。私はヤケクソ気味に缶チューハイをあおり、残っていた中身を全部飲み干した。

「うう……」

シメの雑炊を食べ終わる頃にはお酒が回り、すっかり出来上がってしまっていた。

（頭ぼーつとする……）

「詩穂ちゃん、大丈夫？」

「らいじょうぶ……れす」

「舌回つてないよ？　つか、まさか缶チューハイでそんなに酔っ払うなんて……」

響也さんは申し訳なさそうな顔で、空っぽのアルミ缶と私を見比べている。

「久しぶりに飲んだ、からあ……耐性、なくなっちゃってるみたいで

え……」

「マジか。コレ度数三パーくらいだからジュースみたいなモンだと思ってたのに。詩穂ちゃん酒弱かったんだな。ごめんな」

「ほんろに、らいじょうぶれす、から……っ。もおかえりまひゅ……」

」

床に置いていたバッグの持ち手を引っ掴んで立ち上がろうとすると、

「ふあああ……」

ぐるんと視界が回転して、へたり込んでしまった。

「え、ちょ、ホントにヤバいつて。ちよつと休んでいきな？」

「ふあ……しゅみませ……」

「ほら、膝枕してやるから。落ち着くまでココで寝てな？」

響也さんがソファに座り、ぽんぽん、と自分の膝を叩く。

「うゝゝ……ありがとうございましゅ……」

私は四つん這いでずりずりとソファへ這い上がり、彼の膝の上にこてんと頭を預けた。

（……あったかい……）

どうやら私は思っていた以上に、人のぬくもりに飢えていたらしい。ひとりぼっちで眠る夜は、思いのほか長くて。

これからずつとこんな時間を過ごさなくてはならないのかと思うと、気が狂いそうになる。

（……帰りたく、ないな……）

ずつとここにいたい。彼の胸に抱かれて眠りたい。

それがただ、一時の安らぎだとしても。

「ホンット……詩穂ちゃんてば無防備すぎ。ダメだよ、そんな簡単に

男の膝に乗っちゃ」

さらい、とかたちの良い指先が、こめかみに沿って私の髪の毛を掻き上げる。

「らって……響也さんが誘ったんじゃないですかあ……」

「そうなんだけどねー。危なっかしくて心配だよ、おじさんは」

「あはは、おじさんって。響也さん、わらひとそんなに年変わらないれしょ」

「やー、もうこれでも三十二歳だし。てかさあ……そんなに俺に気を許しちゃっていいの？」

響也さんの指先が、私の耳の後ろをすり、と撫でる。

「一度セックスした仲なんだから、さ。期待しちゃうでしょ」

「……あ……♡」

耳の形を確かめるように、輪郭を辿られて溝を淡く引つかかれる。たったそれだけなのに、頬が熱くなつてふっ、ふっ、と発情したような吐息が漏れてしまう。

「もうえっちな顔になっちゃって……もしかして、詩穂ちゃんもワンチャン期待してた？」

「そんな……こと……あ……っ……っ……♡」

耳に引っかけた指が頬を伝い、首筋から顎を撫でて鎖骨へ降りる。大きな手のひらで乳房を覆われてやわやわと揉みしだかれると、あつという間に背中が反って自分から胸を手のひらに押しつけてしまう。「ほーら、もう発情しちゃってるし。詩穂ちゃんちよろすぎて心配になっちゃうな」

「らって……っ♡響也さんがえっちな触り方、する……からあ……」

♡
」

「俺だけのせいじゃないでしょ？ ダメだよ、こんなエロ乳放り出してフラフラしちゃ。男はみーんな詩穂ちゃんのおっぱいのこと、見てるんだからね？」

むにいいい♡♡

乳肉に指を押し込まれ、左右に引っ張られる。

「おう……ッ♡」

「はは、ひつくい声で喘ぐのエッロ♡これさあ、もう乳首勃っちゃってるでしょ？」

「そんなの……分かりせ……♡♡♡♡♡」

むぎゅ♡♡

今度は手の平で左右から乳房を押し潰されて、乳首をぎゅううう♡

♡と摘まみ上げられる。

カットソーとブラで守られているはずの乳首が、痛いくらいに引つ張られてジンジンあつつく痺れてるっ♡

「まだ直に触ってないのに、こーんなに腰ビクさせて……痛い方が感じるんだな、詩穂ちゃんは」

「ふ……あ……あ……っ♡」

「もうまんこもぐっしょぐっしょなんじゃない？ 確認しよつか」

スカートの中に手を入れられ、ぺらりとめくられる。

露わになった股間を見た途端、響也さんの目尻がいやらしく下がった。

「うわ……何このストッキング。パンツのどこくりぬかれてるんだけど？」

「……こ、これはサ、サスペンダーストッキング……つて言つて……
破けないようにパンティ部レスになつてるので……」

「でも、この間はフツのやつだったじゃん？　もしかして、すぐまんこにちんぽ挿れられるように準備してきた？」

剥き出しの太ももを指でさすりながら、響也さんが囁く。

「た、たまたま……着けてただけで……」

「ホントに？」

太ももを撫でまわしていた指先がそけい部に触れ、恥丘を這い回る。

「あ……♡」

「こんなのさあ……パンツに手を突っ込まれてぐちよぐちよまんこ弄られても、文句言えないよ？」

ごつごつした手が、ショーツの中に潜り込んでくる。

指先はすぐに尖った肉芽を見つけ出し、ちょん♡と先端を突く。

「~~~~~~~~ッ♡♡♡」

とん♡とん♡と指腹で軽く先っぽをタップし続ける。

触れるか触れないかの微かな刺激なのに、あつという間に淫核の中心に血が集まってきて、ぽつてりと肉芽が膨らんでいく。

「わ、もうクリパツパツ。ちっちゃいちんぽみたいでかわいいな

」

すりっ♡すりっ♡

今度は根元から裏筋を撫でさすられて、びくっ♡びくっ♡とそけい部が引きつる。

「ひゃ…………う…………♡あ…………やああ…………♡」

「この間はパンストの上からしか触れなかったもんね。今日は直に弄

り倒してほしかつたんだよね？　だからこんなエロパンスト穿いてきたんでしょ？」

「ちが……いましゅ……♡ホントに、ぐうぜ……あゝ………ッ♡」

「そっかそっか偶然か。にしては気合い入った下着じゃない？　この間と全然違う気がするんだけど。もしかしてブラもおそろ？」
カットソーとキャミソールをめぐり上げられ、胸元を露出させられる。

「お、可愛いブラ。やっぱり俺に会うの期待してくれてたんだ？」
ブラのカップを下に引き降ろされて、ぷるん♡と乳房が飛び出す。
びくうう♡

「んゝもう全部脱いじゃおつか」

ずるつとショーツを引き降ろされて、股間が露わになる。

「わくくり勝手にズル剥けになつて。やらしいなあ」

ぷっくり♡屹立したクリを弾かれて、びくんと腰が跳ねた。

「もしかして、普段から自分でクリ剥いてる？」

「そつ……♡そんなこと、ない……れすっ♡」

「ホントかなあ？」

「ほんと……れすう♡」

「じゃあさ、俺がまんこずぼずぼしてあげるから、詩穂ちゃんは自分でクリ弄ってみな？」

手を握られて、強引に股間に指を這わされる。

「じつ……自分でつ……っ♡」

「……二人の共同作業。ぜったい、気持ちいいよ？」

「う……あ……っ♡」

ずぷぷぷ……っ♡

ごつごつした手が、おまんこの中に分け入ってくる。

太い指が抵抗する花芯をめぐり上げ、にゅぶ♡にゅぶ♡と手首を緩やかに回転させながらねじ込まれてゆく。

ぐっ♡と手の平を押しつけられると、ぬぶっ♡と奥まで指先が呑み込まれた。

「詩穂ちゃんのカ、あつつあつでぬるぬる……♡指一本でぎゅうぎゅうだし、ちっちゃくて可愛いおまんこだね♡」

「ひ……あ……♡」

「こーんなちっちゃなおまんこなのに、この間は俺のデッカいちんぽぐぼぐぼ呑み込んで、美味しそうにしゃぶってたよね。あー思いだし

てムラムラしてきた」

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡

ナカを指でずぼずぼされ、クリ裏をぐう♡と押される。

「クリがぴーんって持ち上がってるよ？ ほら、自分で弄ってみな

……？」

「ん……う……♡は……ふ……んう……♡」

おずおずとクリに指を這わせ、既に勃起上がっている肉芽の脇をそつとなぞる。

たったそれだけなのに、びりびり♡と肉芽の中心から痺れるような甘い愉悅が滲んで恥骨まで響く。

(い……いつもと同じように、してるだけなのにつ♡なんでええ……

♡)

「っ♡はっ♡あ♡あひ♡ん♡う♡うっ♡う♡う♡う♡う♡う♡……..
ッ♡」

ぬぶ♡ぬぶ♡ぬぶ♡ぬぢい♡ぬり♡う♡う♡♡

ち♡ち♡ち♡ち♡♡くり♡くり♡く♡に♡♡ぐり♡♡ぐり♡♡ぐり♡♡

♡

胎内で蠢く指先のリズムに合わせ、むちむちに身が詰まったクリを押し潰して平たくし、ぐりぐりい♡とこね回す。

「ハハ、やっぱクリオナ大好きじゃん？ しかも結構激しいんだね。

メッチャ腰へコしてるし」

「いやああ♡見ないでっ♡見ないでえ♡」

「なんで？ 好きな子のオナニ見ながら指マン出来るなんてサイコーなのに」

「すっ……好きってっ……♡何、言って……っ♡」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 俺、詩穂ちゃんのこと好きだよ

？」

「かつ……からかわないで、ください……っ♡」

「好きじゃなきゃ、こーんなにねちねちまんこ弄らないんだけどな。男なんて、ホントは自分がイクことしか考えてないんだよ？」

こりっ♡こりっ♡

クリ裏にねっとり指を押しつけられて、ざらついた部分を小刻みに揺すられる。

裏からぴーんと押し上げられたクリをV字にキワへ添えた指が引き上げて、こすこすこすこすっ♡ってせわしなく擦ってっ♡

もうブリッジしてるみたいに腰がぐうううう♡と持ち上がって

浅ましくへこついてっ♡

意識が全部クリとおまんこに集中しちゃって、何も考えられないっ♡

「っおっ♡おっほ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

「うわ、詩穂ちゃんえっぐいカッコするね〜？ スマホで撮って見せてあげたいな」

「や……ああ♡そんなのっ♡見たくない……い……♡」

「だーって、スッゴいよ？ AVみたい。胸まで真っ赤にして腰突き出して、がに股で俺の指におまんこ自分から擦りつけて、真っ赤になったクリかきむしるみたいにシコシコして……♡大人しそうなのに性欲強いんだね♡」

「ちが……いましゅう……♡だってっ♡響也さんの指がっ♡きもち

い……からあ♡」

「そうだな。オナニーさせてるのも俺だもんな。うん、詩穂ちゃんは悪くない。ぜーんぶ俺のせい。だから好きなだけイっちゃっていいんだよ?」

「やあああ♡はずかし……っ♡」

「詩穂ちゃんの本気イキ、見たいな?」

ぴんっ♡ぴんっ♡

煽るみたいに乳首を根元に置かれて弾かれる。

「………ッ♡♡♡」

（こんなのずるいい♡むりっ♡もおむりっ♡耐えられないいい♡イクイクイク♡♡イックううううう♡♡）

「ほら、ほら♡チクピンされてGスポなどでされながら、クリオナ

で目一杯イっちゃいな♡」

「ついいいい♡あっ♡あっ♡あっ♡ういつ♡あああゝゝ……………ッ
♡♡♡」

ぷしゅっ♡

弛緩したおまんこから、透明な液体がぴゅう♡と一筋しぶいた。

「は…………えっ♡う、うそっ♡な、なんれっ♡わらひ、おもらししてえ
え…………♡」

「え、詩穂ちゃんもしかして、潮吹いたの初めて？」

「はひ…………♡」

「マジか。俺が初めての男じゃん。うれしー」

はふはふと肩で息をしていると、響也さんに覆い被さられて唇を塞がれる。

「ん……ちゅ……ふ……んう……♡」

「詩穗ちゃんってキス、好きだよな。口の中吸っただけでもうトロツトロ……♡」

「なんか……詩穗ちゃんの口の中、すげー甘い気がする……♡ん……ちゅ……♡コレ……癖になりそ……♡」

じゅるるる♡と口腔内に吸いつかれて唾液を啜られる。

お腹のなかに溜まった快感を胎内から引きずり出されているみたい……♡

ふと、背中にズボン越しに盛り上がった膨らみの熱を感じ、お腹の底がきゅん……♡と引きつれる。

「あ……♡」

（響也さん……勃起、してる……っ♡）

どうしよう。

「勃起してますよ」なんてこつちから言うのはあからさますぎるし

……

でも、気づかないふりをするのもおかしいし……

と、一人もじもじしていると、

「ね……えつち、したい？」

響也さんが身を屈め、私の顔をのぞき込む。耳元で囁かれて、かあつと頬が熱くなつた。

「え……えつと……」

「したい……でしょ？」

ニツ、と響也さんが口の端を吊り上げて笑う。

「……いじ、わる……」

「ごめんね。詩穂ちゃん可愛いから、ついいいじめたくなっちゃって」

もぞ、と起き上がると、響也さんがズボンのポケットをこそこそと探り、コンドームを差し出した。

「これ、詩穂ちゃんがつけて？」

おずおずとそれを受け取り、袋を破いて中身を取り出す。

「……な、なんかこれ……大きくないですか？」

「んゝXLサイズだからな。これでもギリギリっぽいんだよね」

「えっ……えつくすえす……」

もっこり♡とズボンを盛り上げる膨らみと、コンドームを見比べる。大きいとは思っていたけど、まさかそこまでとは。規格外もいいところだ。

「ほーら、見てないで早くして？　俺、もうこのまま射精しちゃいそうだよ」

「っ……ま、待って……っ。す、すぐ着けますからっ……」

慌ててズボンのジッパーを下ろし、ズボンとトランクスを引き降ろす。

ばるんっ♡♡と飛び出た肉棒の迫力に圧倒されつつ、おそろおそろコンドームを被せてぴっちりと嵌める。

「ん、上手だね。もしかして、ゴム着けるの慣れてる？」

「い、いえ……初めて、ですけど……」

「そっか、なら良かった。もし初めてじゃなかったら、ヨシキに嫉妬するとこだったわ」

「……!?　なんでそこで、ヨシキが出てくるんですか!?」

「そりゃ、他の男に舐けられた痕跡残ってたら嫉妬しちゃうでしょう。ほんとは詩穂ちゃんの初めて、俺がぜーんぶ貰いたかったくらい」

（目が笑ってない……）

冗談だか本気だか分からないけど……響也さんに言われるとなんだか嬉しくなってしまう。

「ね、こっち来て？」

とんとん、と響也さんが自分の膝を叩く。上に乗れ、ということなんだろうか？

「し、失礼します……」

四つん這いになり、響也さんの膝へ乗ろうと手をかけると、腰を掴まれて上へ乗せられてしまった。

「……っ♡」

屹立する怒張が、おまんこの前に迫る。

股間に屹立する肉棒からむわあ……♡と漂う熱に股間が燻されて。思わずごくり、と喉が鳴る。

（や、やだ……これじゃまるで、欲求不満みたいじゃない……っ）

「ほら……自分で挿れてみな？」

響也さんがソファの背もたれに背中を預け、ぐっ♡と腰を突き出してみせた。

膝をソファについてゆつくりとお尻を落とし、肉幹に指を添えて

ぴとり♡と淫裂に当てる。

「ん……♡」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

お尻を揺らして割れ目を亀頭に擦りつけると、ずくん♡とお腹に甘

い衝撃が走って愛蜜がたらたらとヨダレみたいに垂れ落ちた。

「すつげえやらしい音してるね……♡ちんぽオナニーでイッちゃうんじゃない？」

「つあ……♡そ、そんな……こと……♡ない、けどお……♡」

「こらくダメだよ、クリコキしちゃ。それ、マジでイっちゃやうやつじやん。ほら、早く挿れてよ……♡俺、もう我慢の限界」

腰を掴まれて、ぐっ♡と切っ先を割れ目に押し込まれる。

「ひゃあ……♡っ♡」

ずぶぶぶぶ……♡

勝手に腰が沈んで、そそり勃った肉棒を呑み込む。

中をみぢみぢと押し開いて、胎内にぐっぽりと熱い塊が埋め込まれてゆく。

(あっ……♡おちんぼの圧、すっご……っ♡)

膣底を押し上げる圧迫感と、こみ上げる愉悦がじんわりと胎内を満たして。

うつとりと目を閉じて、身体に響く快感を堪能する。

「詩穂ちゃんのおまんこ、ちっちゃくて浅くて、俺のちんぽ半分しか入らないね。はぁ……かわいい……♡」

ぐりい……♡

下から浅いストロークでピストンされ、秘奥を抉られる。

「っひ……♡」

ずくん♡と重だるい痺れが、腰を取り卷いた。

「はは……♡腰揺れてんね。いいよ、好きなように動いて。詩穂ちゃん、のきもちーとこ、俺に教えて？」

「あ……う……ふうう……♡は……あ……♡」

ず……りゅ♡ずぶん♡ずぶん♡ずぶん♡

膝を深くソファに押しつけ、お尻を突き出して夢中で腰を振りたく
る。

「うわ、これやらし……♡詩穗ちゃんのおまんこが俺のちんぽぐぽぐ
ぼしてるところがよく見えるよ？」

背中をすり……♡と指先で辿られて、ぞくっ♡と背筋が波打つ。

「は……ひっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

緩いピストンはじわりと浅い快感をもたらしてくれるけれど。

深いところに手が届かなくて、もどかしい。

「一生懸命頑張ってる詩穗ちゃん見てたら、応援したくなっちゃうな

あ……♡」

かりっ♡

乳首を爪で引つ搔かれ、「おうんっ♡」と仰け反ってしまった。
とん、と響也さんの厚い胸板が、後頭部に当たる。

「はは♡メツチャ反応いいな♡♡やっぱ乳首好きだよね？」

「え……あ♡やあ♡かりかりっ♡らめえ♡」

「うつそ。好きなくせに。ほら、クリも一緒に弄ってあげるから」
かりかりかりかりっ♡

びんっ♡びんびんびん♡ぎゅううううううう♡

乳首をきゅゅっ♡と抓られて、ぴん♡と勃ちきったクリトリスの
先っぱを指で弾かれて。

いつしかお尻が激しく弾んで、おまんこがぶっぱ♡ぶっぱ♡と恥ず
かしい音を立てておちんぽにシャブリついている。

「うわゝすげえやらしい音♡まん汁メツチャ泡立ってるよ？」

「いやああ♡そんなこと言わないで……………♡」

ぬるんっ♡

勢い余って、ぬめった秘穴から肉幹がずるりと抜けてしまった。

「あゝ抜けちゃったか……」

「ご……ごめんなひや……」

「だいじょーぶ。今度は抜けないように、ぐ……ッぽり奥までハメてあげるから」

腰を掴まれ、膨らんだ肉傘を淫裂へ宛がわれる。

「はひえ？ あ……………あゝ……………♡」

ば…………ツちゅんツツ♡

ずうううううん♡とお腹の底を突き上げるような重い衝撃が、

身体の中心を貫いた。

(う、うそおお……ッ♡一気にっ、奥まできて……っ♡)

ぬ……ぢゅっ♡とちゅ♡とちゅ♡とちゅ♡

腰を突き上げ、蕩けたポルチオをとん♡とん♡と小刻みに揺らす。

「ひ……く…………ッ♡い……い……♡」

深く、ずっしりと響くような快感が、お腹の中に広がって身体を弛緩させてゆく。

目の裏がチカチカと明滅する。胎内から熱い塊がせりあがって、みづちりと胸まで埋め尽くしているみたいで。

「はっ……は——っ♡は——っ♡は——っ♡」

息がうまく出来なくて、犬みたいに舌をだらりと突き出してはっ、はっと浅い呼吸を繰り返す。

「ふふ……前よりチン媚びじょーずになつてゐるね♡とろつとろのまん肉がちんぽ好き好き♡つて吸いついてきてる」

「ひ……あ……♡お……ほお……ッ♡」

「俺の形におまんこ作り替えてあげる。しつかりちんぽの味、覚えてね？」

膝裏に手をかけて抱え上げられ、下から思いきり突き上げられる。

「~~~~い~~~~い~~~~ひいひい……ッ♡」

ぼ……ちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡

ぱんっぱんに膨らんだ肉傘が、ごちゅっ♡ごちゅっ♡と容赦なく子宮を突き上げる。

ひしやげた子宮がお腹の底にくつついて、じんっ♡じんっ♡と深い痺れが止まらないっ♡

「やあああ〜………ッ♡♡♡やだやだやだ♡おぢるっ♡おぢぢやうう♡こわい♡こわいこわいこわいいよおおおお♡」

「怖くないよ、大丈夫。俺が詩穂ちゃんを受け止めてあげるから……もつと深く、落ちてきて……♡」

どちゅっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ばぢゅっ♡♡♡

肉楔を秘奥に打ち込まれ、ばるん♡と大きく乳房が揺れる。

「っひ……………あっ♡うあああっ♡あっ♡あっ♡あ〜……………ッ♡」

半開きになった唇が、閉じることを忘れたようにわななく。

「あ〜もうっ。詩穂ちゃんかわい……………♡」

はっ♡はっ♡と響也さんの荒い息づかいが、耳元に響いて。

響也さんも、一緒に気持ち良くなってくれているんだと思うと、な

んだか嬉しくなつて頭の内側にぼうつと熱が溜まっていく。

「詩穂ちゃん……好き……♡」

響也さんがまるで噛みつくようにして、首筋へ強く吸いつく。

「……♡♡♡」

その瞬間、おまんこがきゅううんっ♡とめちやくちやに窄まって、
気がつくと、響也さんが苦しい息を吐きながら吐精していた。

「あゝ……？♡は……へあああ……♡」

どつくん♡どつくん♡と胎内で拍動するペニスの熱が、コンドーム
越しに伝わる。

（う……そ……♡もう、射精……されちやったあ……♡）

「はあ……はあ……はあ……♡あゝもう出ちゃった。俺遅漏のはずな
んだけどなく。詩穂ちゃんとセックスすると気持ち良すぎて、すぐ出

「ちゃう」

響也さんが私を抱きしめ、肩に口づけた。
汗ばんだ肌が擦れ合って、ひやりとする。

「……ぜんっぜん物足りないわ。はっ詩穂ちゃんと朝までハメてた
いな」

響也さんが小刻みに腰を揺らす。

繋がったままの胎内で一瞬萎えかけていた肉竿はむくむくと膨らんで、あつという間に元氣を取り戻してゆく。

「げ……元氣すぎ……じゃ、ないですか……っ」

「ん？ ヨシキは違ったの？」

「だから、ヨシキの話はもう……っ」

「あゝごめんごめん。いつまでも別れた男の話すんのウザいよな。っ

「わけで、もっかい上書きさせて？」

にゆるん♡とペニスが結合部から引き抜かれると、とぼつと蜜が溢れてシーツを濡らした。

——私はずるい。

こうなるのが分かっている、わざと彼にしなだれなかった。

また彼の胸に抱かれて甘えたかった。

一夜だけの過ちで終わらせれば、きつと苦しまずに済むのに。

そこかしこに漂う、他の女の^{ひと}気配。

いとも簡単にこちらの懷に飛び込んでくる、絶妙な距離感。

慣れた様子で、ゴムをつけさせる手管。

甘い言葉を囁くのも、口づけを交わすのも、朝まで抱き合うのも、きつと私だけではない。

——この人を好きになったら、地獄だ。

（今だけ……だから……）

ヨシキと別れたばかりで、寂しいから。

真つ暗な部屋に、ひとりでいたくないから。

このからっぽな心と身体を埋めて欲しいだけだから。

心の中で無数の言い訳を並べ立てて、バリケードをつくる。

私はこれ以上傷つきたくない。身を振って内臓を吐き出すほどの鳴

咽に苦しむなんて、もうたくさんだ。

「……どうしたの？　ぼーっとして」

「……なんでもない」

「ん、そっか」

響也さんが私の頬を片手で包んで自分の方を向かせる。

「……詩穂ちゃん、好きだよ」

耳朶を打つ柔らかい低音にうつとりと目を閉じると、唇がそつと降りてくる。

閉じた視界の中でこぼこぼ、とエアポンプの音だけが響いて。

なんだか水の底に沈んでるみたいだな、なんて思った。